

(討伐中にて思ふ時刻思ふ条件にては中々観測し得ず、好条件で見たのは3~4回でした。それもあるき歩きですので、数値等も相当誤差がある事はおゆるし下さい)。

天候(氣象条件)快清無風乃至微風、大氣透明度 良(太陽出時眞紅色を呈する程度)
観測結果(日出時前60分~40分)

長さ及び巾：長さ、十分認識し得る程度100度(オリオン座附近の銀河に相當する光度を有する部分)

巾、観測し得る最下部、十分認識し得る程度30度(オリオン座附近、銀河に相當する光度を有する部分20度)

巾は太陽から離れるに従ひ、ほぼ直線的に減少す。

尚、観測中時間と共に長さが短縮し、最初(かに座)附近に及びしも後には獅子座 α 星附近になりし様観測せり、薄明による物か？。

又、最鮮部の變位を観測せしも、傾斜の爲の錯覺か、僅か乍ら偏在を認む。

甚だ亂雜不完全の報告にて相濟ませんが、今後共何か御役に立つやうな課題がありますれば御知らせ下さいませ。討伐の餘假を利用して幾分なりとお役に立ちたいと思ひます。

末筆乍ら、所員の皆さまの御努力に感謝致しますと共に、御健康を御祈り申上げます。

今般は本田實氏の彗星御發見を御祝し申上げます。匆々

一月31日

戦地のアマチュア

田 村 生

黄道光観測所御中

編輯室より

はるばるイタリア國のポロニヤ市に居る天文家ロレタ氏から、わが國の皇紀二千六百年を祝つて詩稿が贈られたから、本號に載せる。一寸拾ひ讀みしても愉快であるが、邦文譯は追つて掲載するつもり▲紀州田邊の名物男棕平君の文は紙面幅狭のため次號へ▲附録の縦て組み文は神戸の林氏から贈られた原文によつたものです。▲次號は六月號で、例により、“時の記念”の號とし、時や曆に關するものを特輯することとする。又、七月號からは愈々火星の記事を載せたいと思つてゐる。今年の秋は、日食と火星とで、世間も學界も賑はうだらう。